

小学生の漢字力に関する実態調査 全体傾向

日本国語教育学会理事 河西 泰道

調査実施にあたって

今回の漢字力調査は、2007年(旧学習指導要領のもとで実施)に引き続き、児童・生徒が、前学年の配当漢字を書くことができるかどうかを調査する「漢字テスト」と、漢字や読書などに関する「意識調査」の二部構成で行った。

<言語活動の充実と漢字、漢字指導の基礎・基本>

新学習指導要領(2008年告示)では、言語活動の充実がうたわれ、思考力・判断力・表現力等の育成が重視されたことに伴い、文字指導の内容の改善がはかられた。各教科等において記録、要約、説明、論述といった学習活動に取り組むうえでも、漢字の読み書きなど基本的な力を定着させることが重要とされ、特に、漢字の書きの指導では、これまでどおり当該学年に配当されている漢字の定着を次の学年までにはかるとしつつも、当該学年においても文や文章のなかで使うこととされた。日常生活において確実に使えるよう指導を充実するためである。

本調査は、新学習指導要領が全面実施されて3年目の1学期(2013年5～7月)に実施されており、新学習指導要領のもとで行われているこれらの漢字の指導の実態を明らかにしているものと思われる。

また、併せて実施した「意識調査」では、漢字の読み・書きに対する意識のほか、読書に関する意識なども尋ねている。2007年調査と同じ質問項目との比較により、漢字の読み・書きに対する児童・生徒の意識の変化などが分かるとともに、漢字と読書活動の関係なども明らかになっている。下の表をみると、特に、漢字を書くことへの苦手意識が高いが、読書の習慣があまりない子どものほうが漢字力が低いなど、書くことだけでなく、読むこととの関連も確かめられた。

今後の漢字の指導の参考資料として役立てていただければありがたい。

(%)

	2007年調査 全体		2013年調査 (今回) 全体	
	得意	不得意	得意	不得意
あなたは、漢字を読むことが得意ですか。	67.9	30.1	70.8	28.1
あなたは、漢字を書くことが得意ですか。	53.5	44.7	57.7	41.3

※「得意」は、「とても得意」+「まあ得意」の%、「不得意」は、「あまり得意ではない」+「まったく得意ではない」の%。無回答・不明は省略している。

今回の調査でみえてきたこと

漢字テストの「正答率」は約6割と低い

苦手は、「漢字を読み替えた場合」と「生活になじみのうすい言葉」の書き

今回の「漢字テスト」の正答率は全体で59.0%であった。学年別にみると、小2生から小6生にかけて正答率は低下傾向で、中1生では再び上昇していた(P5の表1参照)。

正答率が約6割と低い主な原因は、漢字の配当学年では習わない読み方でも、小学校6年間で学習する読み方は、漢字配当学年の問題として出題していることにある。そのため、低学年ほど難易度が高く、教科書の違いも影響している可能性がある。また、そのほかの原因としては、訓読みになじみがある漢字を音読みで出題したり、同じ漢字でも訓読みがいくつかある場合に正答率が低くなっている。その漢字を知っていても、児童・生徒の生活においてなじみのうすい言葉は多くあり、それらが正答率を下げている。

また、小4生～小6生で正答率が低下するのは、字形の似た漢字が増えて、漢字を正確に書くことが難しくなるためだと考えられる。本調査では、誤答を13の観点から厳密に採点しているため、正確さが求められる。

一方で、中1生では正答率が上昇しており、小学校の漢字指導の成果があらわれているのではないかとと思われる。2007年調査と比べて、小3生～中1生の漢字の無答率が低くなっていることや、意識調査でも、漢字を書くことが「得意」(とても+まあ)の比率が、小3生、小6生、中1生などで増加していることから、書くことへの抵抗感が以前より薄れているように感じる。

このような実態に対して、今後、どのような漢字の指導が必要だろうか。第1には、暮らしのなかにはいくつもの言葉や言い方があること、その多様さ、おもしろさに気づかせる指導である。漢字の学習は、単に文字の読み書きということだけでなく、言葉の獲得であることをさらに意識させたい。第2には、今回の正答率の低さにみられるように、新出漢字について、その文字の多数ある読み方を網羅するのはなかなか困難である。学年間の連携を強化し、既習の漢字が書けるレベルを学年を越えて高めたい。

今後の漢字の指導の可能性とさらなる課題を認識した「漢字力調査」であった。